

近世前期江戸幕府側衆の再検討

―「江戸幕府日記」における就任記事の分析を中心に―

小林 夕里子

はじめに

本稿の目的は、「江戸幕府日記」の記事を分析し、江戸幕府側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関して、先行研究とは異なる見解を示すことである。

松平太郎氏は、側衆に関する概説をしている。⁽¹⁾ 松平氏の説明のうち側衆の制度的変遷を説明した部分を引用する（傍線部は、筆者による。割注は「」内に一行で表記した。）。

惟ふに徳川氏以前夙く傍衆、昵近衆の称あり、之れ単に近侍の汎称にすぎざるがごとし「太閤記参取・武家名目抄」、寛永九年十二月太田采女正資宗、阿部山城守重次共に昵近を命ぜられ小姓組番頭を兼ね、其職已に御側として見るべきもの、後中根平十郎正盛補せられて御側「十一年正月以後此職に補し、同十五年一月に至り壱岐守に叙せらる」となり、十七年六月久世大和守広之又之に補せらる、下つて承応二年九月広之「此時小姓組番頭を兼ね」

近世前期江戸幕府側衆の再検討（小林）

御側牧野佐渡守親成「兼職同上」内藤出雲守忠清「清或は由に作る、小姓組番頭」及土屋但馬守数直「同上」の番頭を免じて、將軍の日夕侍座に任じ、交々代つて夜を衛らしむ、此に至つて乃ち職を兼ねて御側衆たることを罷め専職となせり「厳有院実紀、正慶承明紀、寛政重修諸家譜、吏徴、大猷院実紀、累代武鑑」

享保期に側衆のなかに設置されるといわれている御側御用取次に關しては、次のように説明する。

御側御用取次は御側衆より特に新任せらる、吉宗公紀州より入りて將軍八世の統を繼ぐに當り、享保元年五月扈從の藩士有馬四郎右衛門氏倫「後叙爵して兵庫頭を称す」加納角兵衛久通「後叙爵して遠江守を称す」を御側衆として特に啓達を掌らしめ、先代の輩例に因りて多く職を免ぜらる、蓋し御用取次の濫觴たり、

松平氏は、『徳川実紀』⁽²⁾「厳有院実紀」、「大猷院実紀」、「正慶承明紀」⁽³⁾、『寛政重修諸家譜』⁽⁴⁾、『吏徴』⁽⁵⁾、『武鑑』⁽⁶⁾（累代武鑑）を典拠として側衆の制度的変遷を次のように説明している。

「傍衆」^{（そほうしゅう）}「昵近衆」^{（じつしんしゅう）}という呼称は、徳川氏以前は、「単に近侍の汎称」に過ぎなかった。寛永九年（一六三二）一二月、太田采女正資宗・阿部山城守重次が昵近を命じられ、小姓組番頭も兼ねることになる。このときすでに職務上、「御側」として見るべきものがあつた。

寛永十一年（一六三四）正月以降に中根平十郎正盛が「御側」に補任される。寛永一七年（一六四〇）六月、久世大和守広之が同職に補任される。承応二年（一六五三）九月、久世大和守広之（小姓組番頭兼帯）・「御側」牧野佐渡守親成（小姓組番頭）・内藤出雲守忠由（小姓組番頭）・土屋但馬守数直（小姓組番頭）の四名は番方の役職を解かれて、昼夜將軍に近侍するように命じられ、順番に夜勤することになる。これ以後、他の職を兼ねながら將軍の「御側衆」であることはなくなり、側衆就任者は、側衆を専職とするようになる。享保元年（一七一六）五月、徳川吉宗が紀州藩主から八代將軍職を継ぐ際に紀州藩士有馬四郎右衛門氏倫・加納角兵衛久通を「御側衆」としてとくに啓達を司らせた。そして、先代將軍よりの側衆の多くは職を免じた。この時側衆に就任した有馬・加納の存在は、「御側御用取次」の始まりとなる。

松平氏によって明らかにされた側衆の制度的変遷は、側衆に関する研究の前提となり、側衆の起源、側衆就任者、側衆職務の実態^{（7）}について研究が深められてきた。側衆の起源、側衆就任者に関する研究は、北原章男氏・深井雅海氏により取り上げられている。先行研究は、『徳川実紀』、『寛政重修諸家譜』、『柳営補任』^{（10）}などの後世の編纂史料を中

心に分析したものであり、基本的な事実に関しても間違いがある。

本稿では、「江戸幕府日記」の記事を分析し、側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関して先行研究とは異なる見解を示したい。なお、本稿での側衆就任者の考察範囲は、寛永→正徳期（一六二四→一七一五）までの就任者を対象とし、享保元年（一七一六）以降の就任者については、別稿にゆずることとする。これは、享保元年（一七一六）に紀州藩士が將軍の側衆に就任することで、御側御用取次の萌芽がみられ、同時期に制度的画期があると考えられるからである。

1 先行研究の問題点

側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関しては、松平太郎氏・北原章男氏・深井雅海氏の研究で取り上げられている。松平氏の見解はすでにあげている。本章では、北原氏・深井氏が示す根拠と見解をあげた上で、先行研究の問題点を示す。

北原氏は、①『徳川実紀』、『寛政重修諸家譜』の記事を分析し、中根平十郎正盛が、諸大名の監察、評定所出座など、後の側衆と同様の職務を司ることを解明し、②『柳営補任』の「御側衆」の項に「家綱公御代承応二巳九月一八日初而四人被仰付」という記述があること、③『徳川実紀』に「御側兼小姓組番頭久世大和守広之、御側出頭兼書院番頭牧野佐渡守親成、小姓組番頭内藤出雲守忠由・土屋但馬守数直は、各番頭をゆるされ、昼夜御前に伺候し、夜は一人づ、御次に宿直

すべしと仰付ら」れたという記述があること。以上、①～③から、寛永期の「御側」中根平十郎正盛は側衆の源流であり、側衆が職制として成立するのは、承応二年（一六五三）九月一八日に番方を解任され、宿直することを命じられた久世大和守広之・牧野佐渡守親成・内藤出雲守忠由・土屋但馬守数直四名の時であると整理する。

深井氏も、北原氏の見解に従い、承応二年（一六五三）九月一八日に側衆が公式に設置されると理解し、『柳宮補任』収録の側衆就任者を抽出し、家綱・綱吉期の側衆の前任職、後任職、昇進経路などを考察している。松平氏・北原氏・深井氏の研究は、同時代史料を使っているわけではないが、『徳川実紀』、『寛政重修諸家譜』、『柳宮補任』などの後世の編纂史料の記事を中心に分析しているために次の問題がある。④北原氏・深井氏が、『柳宮補任』、『徳川実紀』の記事を根拠に承応二年（一六五三）九月一八日を側衆が公式に設置された時であると理解していること、⑤深井氏が、『柳宮補任』の「御側衆」の項目に収録される家綱・綱吉期の就任者を無批判に抽出し、前任職、後任職、昇進経路などを考察していることである。上記④・⑤に関して、一次史料によって確認すると、側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関する基本的な間違いがある。本稿では、側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関して再検討し、異なる見解を示したい。

2 側衆就任者就任日における記事

前章では、側衆の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関する研究は、後世の編纂史料を無批判に使用した研究により深められてきたので、基本的な事実に関しても間違いがあることを指摘した。本章では、「江戸幕府日記」を分析し、側衆の起源、側衆就任者に関して先行研究とは異なる見解を示したい。

管見によれば、a『柳宮補任』、b『古事類苑』⁽¹¹⁾所引「徳川実紀」、c『江戸時代制度の研究』⁽¹²⁾は、側衆の起源、側衆就任者に関して記述する代表的な編纂史料や文献であると考えられる。そこで、a～cにおける側衆の起源、側衆就任者に関する情報を「江戸幕府日記」における記事と比較することで検討する。その上で、「江戸幕府日記」の記事からいえる筆者の見解を示す。なお、本稿において使用する「江戸幕府日記」は、寛永承応期（一六二四～一六五四）までは、姫路酒井家本「江戸幕府日記」（以下、「幕府日記」）、寛文期（一六六一～一六七三）以降は一橋家本「御日記」（以下、「御日記」）である。⁽¹³⁾巻末【側衆関連人物一覧】には、a～cに側衆として収録される人物のうち「江戸幕府日記」に記事の存在する人物に関して、就任時の将軍、就任期間、前職、後職、就任時の「江戸幕府日記」の記事、出典（「江戸幕府日記」の種類）をまとめた。

No. 1～12を検討してみよう。

【No. 1】cによれば、寛永九年（一六三二）十二月、太田采女正資

宗・阿部山城守重次が昵近と小姓組番頭に補任され、このときすでに「御側」としてみるべきものがあったとある。「幕府日記」寛永九年（一六三二）二月一日条には、「太田采女・阿部山城可致昵近旨、其上御小姓組頭被 仰付之、」とあり、太田采女正資宗・阿部山城守重次が昵近をするべき旨、および小姓組番頭に補任されたことが記述されている。なお、◎によれば、寛永十一年（一六三四）正月に中根平十郎正盛が「御側」に就任することが指摘されている。しかし、同趣旨の記事は「幕府日記」では、確認できない。

【No.2】◎によれば、寛永一十七年（一六四〇）六月、久世大和守広之は「御側」に就任する。「幕府日記」寛永一十七年（一六四〇）六月一日条には、「久世大和守於奥御側御奉公可仕之旨上意之趣、阿部豊後守・阿部対馬守・三浦志摩守伝之、」とある。つまり、久世大和守広之は、將軍家光のいる奥において「御側御奉公」をするように命じられたのである。

【No.3】⑥は、側衆関連史料として、『徳川実紀』慶安元年（一六四八）六月一日条を引用する。「幕府日記」慶安元年（一六四八）六月一日条には、次のようにある。

牧野佐渡守、久世大和守・内田信濃守・斎藤撰津守、此四人之内代々兩人者御側、兩人者御表、小出越中守・岡田淡路守代々御側御表、安西甚兵衛・北条新藏・中根二郎左衛門・遠山十右衛門・駒井右京・曾我太郎右衛門六人之内二人者御側四人者御表、如此被相詰殿中出仕之面々并諸番所之作法、所々壁書之面御法度之趣

等相守哉、右之様子令見聞御夜詰之次、又ハ急速ニモ可致言上之旨被 仰付候間、弥万事連々被 仰付候通、堅可相守之、并面々家僕等対御直参之輩無作法無之様可申付旨御目付中触之、

書院番頭牧野佐渡守親成、小姓組番頭久世大和守・内田信濃守正信・斎藤撰津守三友の四名は、交代で二名は「御側」、二名は「御表」に詰める。徒頭小出越中守尹貞・岡田淡路守重治は交代で「御側」か「御表」に詰める。新番頭安西甚兵衛元眞・北条新藏正房・中根二郎左衛門正寄・遠山十右衛門景重・駒井右京親昌・曾我太郎右衛門包助の六名のうち二名は「御側」、四名は「御表」に詰める。以上のように殿中に詰めて、殿中に出仕する面々、各番所の作法、法令の趣旨を守るかどうかを見聞し、夜勤の次の日、あるいは、気づいたらすぐにも言上するように命じられた。つまり、牧野佐渡守親成・久世大和守広之を含む番方役人が交代で昼夜「御側」あるいは、「御表」に詰めるようになったことが記されるのである。

【No.5】①・②・③によれば、承応二年（一六五三）九月一日、久世大和守広之・牧野佐渡守親成・内藤出雲守忠由・土屋但馬守数直がそれぞれ番方の役職を解任され將軍の御側に詰めることになる。なお、松平氏は、この日以降の就任者は御側衆を専職とすると理解している。また、④の記述を根拠に、北原氏・深井氏は、この日を側衆の公式設置と理解している。内閣文庫本「江戸幕府日記」承応二年九月十八日条には、次のようにある。

自今夜御表御寝、去二月御寝、其後中絶、又今夜如此、因茲松平^②

伊豆守・松平和泉守・阿部豊後守一人宛 御城令宿、又牧野佐渡守・久世大和守・内藤出雲守・土屋但馬守各御番頭役御免一人宛 昼夜御近習可勤仕旨被仰付云々、

承応二年（一六五三）九月一八日以降、將軍家綱は、中奥で就寝することになる。承応二年（一六五三）二月にも中奥で就寝することになったが、中断していた。この日からまた中奥で就寝することにする。これにより、老中松平伊豆守信綱・松平和泉守乗寿・阿部豊後守忠秋は一人宛江戸城で宿直する。また、牧野佐渡守親成・久世大和守広之・内藤出雲守忠清・土屋但馬守数直は、それぞれ番方の役職を解任されて、一人づつ昼夜御近習をする旨を命じられた。ここで注目したのは、【傍線部①】承応二年（一六五三）二月に家綱が寢所を大奥から中奥に変更したが、中断していたことが記述されていること、【傍線部②】牧野佐渡守親成（「御近習」・久世大和守広之（「御近習」・内藤出雲守忠清（「御近習」・土屋但馬守数直（「御近習」）のみでなく、老中松平伊豆守信綱・松平和泉守乗寿・阿部豊後守忠秋らも江戸城に宿直していることである。老中は、將軍と行動をともしにしており、將軍側近として宿直している。【傍線部①】によれば、徳川家綱が寢所を大奥から中奥に移動したのは初めてではないことが記述されている。この点に関して確認してみよう。【No.4】「幕府日記」承応二年（一六五三）二月三日条には、「吉日付、今夜初而御表御寝、因茲老臣一人宛御城令宿云々、」とある。承応二年（一六五三）二月三日の夜、將軍家綱は初めて中奥で就寝することになった。これにより、老臣を

一人づつ江戸城で宿直させる。「老臣」とは、年寄、あるいは、年寄を含めた上級の幕臣を指すと考えられる。つまり、「老臣」は、將軍と行動をともしにする將軍側近として宿直している。以下、No.6～67は、①『柳宮補任』に収録される側衆就任者である。また、これ以降、「江戸幕府日記」は、「御日記」を使用する。

No.6～12を検討してみよう。【No.6】渡辺丹後守吉綱は、「御側御奉公内藤出雲守跡」と記される。つまり、渡辺丹後守吉綱は、「内藤出雲守跡」であり、内藤出雲守忠清（「御近習」）は「御側御奉公」でもある。【No.7】板倉筑後守重直は、「御近習之御奉公」と記される。【No.8】松平民部少輔氏信は、「久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並二可被仕旨被 仰付之、」と記される。つまり、あくまでも久世大和守広之（「御近習」・土屋但馬守数直（「御近習」・板倉筑後守重直（「御近習之御奉公」）と何らかが「並」に命じられた。【No.9】森川下総守重名は、「板倉筑後守・松平民部少輔同役」と記される。つまり、板倉筑後守重直（「御近習之御奉公」）、松平民部少輔氏信（「久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並」）と何かしらが「同役」になったのである。【No.10】松平因幡守信興は、「板倉筑後守・松平民部少輔並二御奉公可仕旨被 仰付、」と記される。つまり、板倉筑後守重直（「御近習之御奉公」・松平民部少輔氏信（「久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並」）「並」に「御奉公」するように命じられた。【No.11】石川美作守乗政は、「御側衆三人衆並二被 仰付之、」と記される。この「御側衆三人衆」とは、板倉筑後守重直（「御近習之御奉公」）、松平民

部少輔氏信（「久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並」）、松平因幡守信興（「板倉筑後守・松平民部少輔並」に「御奉公」である。「御側衆三人衆」とは、「御近習之御奉公」、「〇〇（個人名）並」¹⁴と表記される人物を指す。【No.12】内藤若狭守重頼は、「御側御奉公被仰付、是松平民部少跡役也」と記される。松平民部少輔氏信（「久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並」）は、「御側御奉公」でもある。【No.13】～【No.67】までは、就任日に「御側」あるいは「御側衆」と表記される。

以上の検討結果から次の見解を示す。

（１）寛永九年（一六三二）～延宝四年（一六七六）、側衆就任者【No.1】～【No.12】は、「御近習」、「御側御奉公」、「御近習之御奉公」、「〇〇（個人名）同役」、「〇〇（人名）並」、「御側衆」と称された。「〇〇（個人名）並」、「〇〇（個人名）同役」は、特定の個人（の格式・役目など）と「並」「同役」という意味であると考えられる。「〇〇（個人名）同役」、「〇〇（個人名）並」は、「御側御奉公」「御近習之御奉公」「御側衆」でもあり、少なくともこの時期までは「御側衆」が汎称であり、就任者とされる人物も「御側衆」を専職としているとも言い切れない。また、その立場も「並」「同役」という表記から不安定なものであったと考えられる。承応二年（一六五三）九月一日をもって、側衆就任者がこの時を画期に専職とする、あるいは、この時を公式設置とする見解は成り立たないのではないだろうか。

（２）延宝八年（一六八〇）七月九日、初代『側用人』¹⁵牧野備後守

成貞が本丸に入って以降、【No.1】～【No.12】までの側衆就任者の就任記事の特徴である「御側御奉公」、「御近習之御奉公」、「〇〇（個人名）同役」、「〇〇（個人名）並」、という表記が使用されなくなり、一部の『側用人』就任者に使用されるようになる。つまり、【No.1】～【No.12】における表記の特徴は牧野備後守成貞出現後、一部の『側用人』就任者就任日における記事の特徴へ移行する。【No.1】～【No.12】までの流れは、牧野備後守成貞の出現で、一部の『側用人』就任者に移行した、あるいは、【No.1】～【No.12】までの流れは、本来は『側用人』へ連なる流れであったことを意味するのではないだろうか。

3 側衆から『側用人』に昇進した人物の就任日における記事

前章では、表記上の特徴が側衆から『側用人』へ移行したことを明らかにした。本章では、研究史上、側衆から『側用人』へ昇進するとされる人物の側衆就任日、および『側用人』就任日における「御日記」の記事を分析し、先行研究とは異なる見解を示す。研究史上、側衆から『側用人』に昇進するとされている人物は、牧野備後守成貞、喜多見若狭守重政、【No.22】牧野伊予守忠貴、【No.25】南部遠江守直政、【No.26】畠山民部大輔基玄、【No.29】松平右京亮輝貞、【No.54】戸田大炊頭忠時である。

福留真紀氏は、「江戸幕府日記」類で確認できる「御側御用人」と

いう文言の初出は、宝暦六年（一七五六）五月二一日の大岡忠光の就任記事であることを指摘し、綱吉政権前期における『側用人』の就任日、離職日を確定した。⁽¹⁶⁾そして宝暦六年（一七五六）五月二一日の大岡忠光よりも前に就任した『側用人』を「役職としての側用人」ではないが、「側用人として一括される集団」と理解している。大岡忠光より前の『側用人』就任者は、「役職としての側用人」ではないが、「側用人として一括された集団」ともいえるのであろうか。それでは、検討してみよう。

研究史上、牧野備後守成貞は、側衆に就任し、その後『側用人』に昇進すると理解される。しかし、「江戸幕府日記」類⁽¹⁷⁾には、同人が側衆に就任したという記事はない。牧野備後守成貞の側衆就任日である延宝八年（一六八〇）七月九日条には、「牧野備後守御本丸江可被召連之旨被 仰付之、」とあり、本丸に入るように命じられたことのみ記される。また、『側用人』就任日とされる天和元年（一六八一）二月一日条には、「被任四品 牧野備後守」とあり、官位が昇進しているのみである。牧野備後守成貞は、もともと幕府の側衆とは位置づけが異なる將軍の御側にいる役人だったのではないだろうか。なお、福留氏は、喜多見若狭守重政も側衆から『側用人』に昇進すると理解している。しかし、側衆就任日とされる延宝八年（一六八〇）九月二六日条には、「喜多見五郎左衛門事、御側御小姓被 仰付、」とあり、喜多見若狭守重政は、「御側御小姓」であり、側衆ではない。『側用人』就任日とされる天和二年（一六八二）九月六日条には、「喜多

見若狭守事、牧野備後守相勤候儀、見習可申旨被 仰付之、」とあり、牧野備後守成貞の勤めを見習うよう命じられているのみである。

【No.22】牧野伊予守忠貴は、貞享三年（一六八六）十一月二六日、「御側衆」になる。元禄元年（一六八八）九月二一日、「御近習之御奉公」になる。先行研究では、この時を『側用人』就任日としている。同日に側衆になった南部遠江守直政は、「御側衆牧野伊予守跡南部遠江守被 仰付之、」とある。ここで注目したいのは、このときには、「御側衆」＝「御近習之御奉公」ではなくなり、両者は別の役目あるいは役職を表していることである。

【No.22】畠山民部大輔基玄は、元禄元年（一六八八）十一月二四日、「御側衆」になる。『側用人』就任日とされる元禄二年（一六八九）二月七日条には、「奥御詰衆金森出雲守並」とあり、あくまでも「奥御詰衆」の「金森出雲守」並である。

【No.29】松平右京亮輝貞は、元禄二年（一六八九）五月一八日、「御側衆」になる。『側用人』就任日とされる元禄七年（一六九四）八月二七日条には、「松平右京亮事、壱万石御加増被下之、柳沢出羽守列二被仰付、」とある。あくまでも「柳沢出羽守列」である。

【No.54】「御日記」には、「〇〇（役職名・個人名など）列」という記述が頻出する。「列」とは、何を意味するのであろうか。戸田大炊頭忠時を例に検討してみよう。先行研究の理解では、同人は、桜田館家老↓西丸側衆↓「側用人」↓表詰、という昇進経路をたどる。それぞれの就任日を「御日記」でみてみよう。

（1）西丸側衆就任時、宝永元年十二月五日条。

御側衆被 仰付、

（2）『側用人』就任時、宝永二年八月一日条。

御側衆列 御免、向後御門之下座可仕旨也、

（3）表詰就任時、宝永三年十月十五日条。

表御詰 西丸御側衆戸田大炊頭

（1）では、西丸側衆に就任し、（3）の時点でも、西丸側衆である。

戸田大炊頭忠利の（1）～（3）の期間における役職は西丸側衆である。同人は、（2）において、「御側衆列」は罷免され、「御門之下座」に変更されている。「御門之下座」とは、江戸城の各門を通る際、門番たちが下座するという格式を表している。この格式は、老中に適用される格式である。よって、戸田は、（1）～（3）の期間、格式の変更はあったが、御側衆のままであった。【No.25】南部遠江守直政も同様であると考えられる。以上の検討結果によれば、④牧野備後守成貞、喜多見若狭守重政は側衆ではないこと、⑤『側用人』とは、あくまでも後世からみて『側用人』の要素をもつ人物を一周りにした集団であることが明らかとなった。したがって、当該期、『側用人』は存在しないと理解するべきである。側衆→『側用人』という昇進経路も存在しない。

おわりに

以上、「江戸幕府日記」における就任記事を分析し、江戸幕府側衆

の起源、側衆就任者、側衆就任者の後任職に関して先行研究とは異なる見解を示した。

1. 寛永九年（一六三二）～延宝四年（一六七六）、側衆就任者は、「御近習」「御側御奉公」「御近習之御奉公」「○○（個人名）同役」「○○（個人名）並」「御側衆」と称された。「○○（個人名）並」「○○（個人名）同役」は、特定の個人（の格式・役目など）と「並」「同役」という意味であると考えられる。「○○（個人名）同役」「○○（個人名）並」は、「御側御奉公」「御近習之御奉公」「御側衆」でもあり、少なくともこの時期までは「御側衆」が汎称であり、側衆就任者は、側衆を専職としているとはいえない。また、その立場も「並」「同役」という表記から不安定なものであったと考えられる。承応二年（一六五三）九月一日をもって、側衆就任者がこの時を画期に専職とする、あるいは、この時を公式設置とする見解は成り立たないのではないだろうか。
2. 延宝八年（一六八〇）七月九日、初代『側用人』牧野備後守成貞が本丸に入って以降、側衆就任者【No.1】～【No.12】の就任記事の特徴は、一部の『側用人』就任者就任日における記事の特徴へ移行する。【No.1】～【No.12】までの流れは、牧野備後守成貞の出現で、一部の『側用人』就任者に移行した、あるいは、【No.1】～【No.12】までの流れは、本来は『側用人』へ連なる流れであったことを意味するのではないだろうか。
3. 牧野備後守成貞、喜多見若狭守重政は側衆には就任していない。

また、当該期、『側用人』は、存在していない。つまり、側衆→『側用人』という昇進経路も存在しない。

記の文献が出典である。）

注1 松平太郎著・進士慶幹校訂『校訂 江戸時代制度の研究』柏書房、一九七二年。一五五～一五九頁。（初出は、一九一九年。）

(2) 『徳川実紀』吉川弘文館 一九七六年。江戸幕府選。本書の編集は寛政十一年（一七九九）に林大学頭述斎が具体的に建議し、享和元年（一八〇一）に決定した（『国史大辞典』）。

(3) 「正慶承明紀」（国立公文書館所蔵）

(4) 続群書類従完成会『寛政重修諸家譜』一九六四年。寛政年間（一七八九～一八〇二）に江戸幕府が編纂（『国史大辞典』）。

(5) 「吏徴」（国書刊行会編『続々群書類従』国書刊行会、一九〇六年。）江戸幕府奥右筆向山源太夫が、弘化二年（一八四五）に著作したといわれている（『国史大辞典』）。

(6) 深井雅海・藤実久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』、東洋書林、一九九六年。民間の書肆の手により編集・出版（『国史大辞典』）。

(7) 北原章男「家光政権の確立をめぐる」、『論集日本歴史七 幕藩体制一』有精堂、一九七三年。（初出は、一九六六年。）／深井雅海「徳川幕府初期の側衆―側衆の監察機能とその消滅を中心に―」、『徳川将軍政治権力の研究』吉川弘文館、一九九一年。（以下、両氏の見解は、上

(8) 深井氏前掲書、註(7)。

(10) 東京大学史料編纂所編『柳宮補任』東京大学出版会、一九六三年。幕臣根岸衛奮の編纂による江戸幕府諸役人任免記の類。天保八年（一八三七）正月より着手し、安政五年（一八五八）八月に一応完成し、のちに加筆して慶応期まで記している（『国史大辞典』）。

(11) 古事類苑刊行会『古事類苑』、一九二七年。同書は、明治・大正年間（一八六八～一九二六）に編纂された。

(12) 松平氏前掲書、註(1)。

(13) 承応二年九月一八日条は、内閣文庫本「江戸幕府日記」。

(14) 「〇〇並」とある場合、〇〇そのものを指すわけではない（藤井譲治『江戸時代の官僚制』青木書店、一九九九年。七八～八二頁）。

(15) 当該期、側用人は存在しないので、研究史上、側用人とされた人物は『側用人』と表記する。

(16) 本章では、側用人就任者の就任日、離職日は、福留真紀氏の側用人一覧を対象にした（福留真紀『徳川将軍側近の研究』吉川弘文館、二〇〇六年。／同『将軍側近柳沢吉保』新潮社、二〇一一年）。

(17) 大河内家本「江戸幕府日記抜書」（豊橋市美術博物館、内閣文庫本「江戸幕府日記」（国立公文書館、内閣文庫本「柳営日次記」（国立公文書館、一橋家本「御日記」（東京国立博物館）。

側衆関連人物一覧

No.	姓 名	将軍	就任期間	前 職	後 職	就任時の記事	出典
一	太田采女正資宗 阿部山城守重次	家光	寛永九・二・一四	小姓組番頭 (兼帯)		太田采女・阿部山城可致昵近旨、其上御小姓組頭被仰付之、	①
二	久世大和守広之①	家光	寛永一七・六・一六、 一六	小姓組番頭 (兼帯)		久世大和守於奥御側御奉公可仕之旨上意之趣、阿部豊後守・阿部対馬守・三浦志摩守伝之、	②

No.	姓 名	將軍	就任期間	前 職	後 職	就任時の記事	出典
三	牧野佐渡守親成① 久世大和守広之② 内田信濃守正信 斎藤摂津守三友 小出越中守尹貞 岡田淡路守重治 安西甚兵衛元眞 北条新蔵正房 中根二郎左衛門正寄 遠山十右衛門景重 駒井右京親昌 曾我太郎右衛門包助	家光	慶安一・六・一八 }	書院番頭 小姓組番頭 小姓組番頭 徒頭 徒頭 新番頭 新番頭 新番頭 新番頭 ※以上、兼 帯のまま。		牧野佐渡守・久世大和守・内田信濃守・斎藤摂津守、 此四人之内代々兩人者御側、兩人者御表、小出越中守・ 岡田淡路守代々御側御表、安西甚兵衛・北条新蔵・ 中根二郎左衛門・遠山十右衛門・駒井右京・曾我太郎 右衛門六人之内二人者御側四人者御表、如此被相詰殿 中出仕之面々并諸番所之作法、所々壁書之面御法度之 趣等相守哉、右之様子令見聞御夜詰之次、又ハ急速ニ も可致言上之旨被 仰付候間、弥万事連々被 仰付候 通、堅可相守之、并面々家僕等対御直参之輩無作法無 之様可申付旨御目付中触之、	③
四	老臣	家綱	承応二・二・三 }	不明		吉日付、今夜初而御表御寝、因茲老臣一人宛御城令宿 云々、	④
五	牧野佐渡守親成② 久世大和守広之③ 内藤出雲守忠清 土屋但馬守数直	家綱	承応二・九・一八 寛文二・二・二二 承応二・九・一八 承文三・一・二八 承文二・九・一八 寛文一・六・二五 承文二・九・一八 寛文二・二・二二	小姓組番頭 書院番頭 小姓組番頭 小姓組番頭 若年寄 京都所司代 逼塞、後寄合 若年寄	自今夜御表御寝、去二月御寝、其後中絶、又今夜如此、 因茲松平伊豆守・松平和泉守・阿部豊後守一人宛 御 城令宿、又牧野佐渡守・久世大和守・内藤出雲守・土 屋但馬守各御番頭役御免一人宛昼夜御近習可動仕旨被 仰付云々、	⑤	
六	渡辺丹後守吉綱	家綱	寛文一・七・二一 寛文一・一・一八	留守居	大坂城番	御側御奉公内藤出雲守跡	⑥
七	板倉筑後守重直	家綱	寛文一・一・九 延宝四・四・一〇	書院番頭	辞	御近習之御奉公	⑥
八	(並) 松平民部少輔 氏信	家綱	寛文二・二・八 延宝二・二・一六	大番頭	辞	久世大和守・土屋但馬守・板倉筑後守並ニ可被仕旨被 仰付之、	⑥
九	森川下総守重名	家綱	寛文二・二・二二 寛文六・二・一八	小姓組番頭	卒	板倉筑後守・松平民部少輔同役	⑥
一〇	(並) 松平因幡守信 興	家綱	寛文七・一・二五 延宝七・七・一〇	小姓組番頭	若年寄	板倉筑後守・松平民部少輔並ニ御奉公可仕旨被 仰 付、	⑥

一一	石川美作守乗政	家綱	寛文一二・四・九 延宝七・七・一〇	小姓組番頭	若年寄	御側衆三人衆並二被 仰付之、	⑥
一二	内藤若狭守重頼	家綱	延宝四・二・二一 天和三・閏五・三	大番頭	辞	御側御奉公被 仰付、是松平民部少跡役也、	⑥
一三	三枝撰津守守俊	家綱	延宝七・八・一二 延宝八・八・一三	大番頭	駿府城代	御側	⑥
一四	稲葉石見守正休	家綱	延宝七・八・一二 天和二・三・二二	書院番頭	若年寄	御側	⑥
一五	板倉市正重大	綱吉	延宝八・閏八・九 天和三・七・五	留守居	菊之間縁頼詰	御側衆被 仰付之、	⑥
一六	金田遠江守正勝	綱吉	天和一・三・二一 貞享三・六・二三	館林城代	辞	御本丸御側衆被 仰付之、	⑥
一七	朽木和泉守植矩	綱吉	天和二・三・二二 貞享二・九・一九	徳松殿御伝	辞、後大番頭	御側	⑥
一八	大久保佐渡守忠高	綱吉	天和三・七・六 元禄二・七・四	留守居	閉門	御側衆板倉市正跡江大久保佐渡守被 仰付之、	⑥
一九	稲垣安芸守重定	綱吉	天和三・七・一八 貞享二・一・一六	徳松様御附	若年寄	御側衆江	⑥
二〇	曾我播磨守助興	綱吉	貞享二・九・二七 元禄一〇・二・一四	新番頭	菊之間縁頼之席	御側衆江	⑥
二一	松平隼人正忠冬	綱吉	貞享二・二・二七 元禄五・三・一	勘定頭	辞	御側衆江御勘定頭松平隼人正被 仰付之、	⑥
二二	牧野伊予守忠貴	綱吉	貞享三・一・二六 元禄一・九・一二	小姓組番頭	御近習御奉公	御側衆江	⑥
二三	林信濃守忠隆	綱吉	貞享三・一・二六 元禄五・三・一〇	大目付	辞	御側衆江	⑥
二四	松平美作守直丘	綱吉	貞享五・五・二三 元禄七・一・二八	大番頭	奏者番	御側衆江	⑥
二五	南部遠江守直政	綱吉	元禄一・九・一二 元禄一・一・一二	詰衆	喜多見若狭守列	御側衆牧野伊予守跡南部遠江守被 仰付之、	⑥
二六	畠山民部大輔基玄	綱吉	元禄一・一・一四 元禄二・二・二七	奥高家	奥御詰衆金森出雲守並	御側衆	⑥

No.	姓 名	将軍	就任期間	前 職	後 職	就任時の記事	出典
二七	松平安房守信孝	綱吉	元禄一・一一・一四 元禄二・五・一一	書院番頭	若年寄	御側衆	⑥
二八	森川下総守重高	綱吉	元禄二・五・三 元禄二・一一・一八	大番頭	辞	御側衆	⑥
二九	松平右京亮輝貞	綱吉	元禄二・五・一八 元禄四・九・二五	中奥小姓	辞	御側衆	⑥
三〇	酒井甲斐守忠正	綱吉	元禄二・一一・二一 元禄四・一一・二九	留守居	卒	御側衆	⑥
三一	瀧川越前守利綿	綱吉	元禄二・一一・二一 元禄九・四・一一	書院番頭	寄合	御側衆	⑥
三二	仙石因幡守久信	綱吉	元禄五・一一・二一 元禄一〇・一一・二四	留守居	菊之間縁頼之席	御側衆	⑥
三三	米倉丹後守正尹	綱吉	元禄五・一一・二一 元禄九・三・二八	桐間番頭	若年寄	御側衆	⑥
三四	青木甲斐守重成	綱吉	元禄五・三・一一 元禄六・八・九	留守居	辞	御側衆	⑥
三五	藤堂伊予守良直	綱吉	元禄六・四・二八 宝永三・一一・八	留守居	卒	御側衆被 仰付、	⑥
三六	安藤伊勢守定行	綱吉	元禄六・四・二八 宝永六・二・二一	廊下番頭	寄合	御側衆被 仰付、	⑥
三七	北条美濃守氏治	綱吉	元禄六・九・二五 元禄九・五・二九	大番頭	卒	御側衆	⑥
三八	柴田出雲守勝門	綱吉	元禄六・九・二五 元禄九・三・一八	桐間番頭	寄合	御側衆	⑥
三九	北条安房守氏平	綱吉	元禄八・二・五 元禄八・五・二四	留守居	留守居年寄	御側衆江	⑥
四〇	嶋田大和守利由	綱吉	元禄八・六・一〇 宝永二・八・二九	大目付	辞	御側衆	⑥
四一	松平東市正正勝	綱吉	元禄八・六・一〇 元禄一〇・二・一四	旗奉行	菊之間縁頼詰	御側衆	⑥

四五	小出土佐守有仍	綱吉	宝永一・一二・五 宝永二・四・二三（西丸）	桜田館家老	寄合	御側衆被 仰付之、	⑥
五四	戸田大炊頭忠時	綱吉	宝永一・一二・五 宝永二・八・一	桜田館家老	雁間	御側衆被 仰付之、	⑥
五三	中川淡路守成慶	綱吉	宝永一・九・二七 宝永六・二・二一	桐間番頭	辞、大目付	御側衆	⑥
五二	近藤備中守用高	綱吉	宝永一・九・二七 宝永二・七・二八	留守居	卒	御側衆	⑥
五一	溝口撰津守宣就	綱吉	宝永一・八・二二 元禄一・六・一一・六	留守居	卒	御側衆	⑥
五〇	一柳土佐守末禮	綱吉	宝永一・六・一一・六 宝永六・二・二一	留守居	柳間	御側衆	⑥
四九	大久保長門守教寛	綱吉	（一）元禄二・二・閏 二・八 宝永二・二・二五 （本丸） （二）宝永二・二・二五 宝永三・一〇・二五（西丸）	書院番頭	若年寄（西丸）	御側衆／西丸御側衆	⑥
四八	安藤出雲守信富	綱吉	元禄一〇・八・二三 享保四・九・二八	書院番頭	卒	御側衆	⑥
四七	太田隠岐守資良	綱吉	元禄一〇・八・二三 元禄一一・二・二二	書院番頭	辞、後大番頭	御側衆	⑥
四六	中根大隅守正延	綱吉	元禄一〇・八・二三 元禄一五・七・二二	留守居	御側席	御側衆	⑥
四五	横田甚右衛門由松	綱吉	元禄一〇・二・一一 元禄一〇・六・二五	持筒頭	百人組頭	御側衆江	⑥
四四	水野越前守重矩	綱吉	元禄一〇・二・一一 宝永六・二・二一	書院番頭	寄合	御側衆江	⑥
四三	青山伊賀守秘成	綱吉	（一）元禄九・四・一四 宝永二・二・二五（本丸） （二）宝永二・二・二五 享保五・四・五（西丸）	書院番頭	駿府城代	御側衆、西丸御側衆	⑥
四二	水野肥前守忠明	綱吉	元禄九・四・一四 正徳一・九・五	表詰衆	大坂定番	御側衆	⑥

No.	姓 名	将軍	就任期間	前 職	後 職	就任時の記事	出典
五六	井上遠江守正長	綱吉	宝永一・一二・五 正徳五・二・二八	桜田館家老	奏者番兼寺社奉行	御側衆被 仰付之、	⑥
五七	宇津出雲守教信	綱吉	宝永二・二・一五 宝永六・二・二一	書院番頭	寄合	御側衆	⑥
五八	保田越前守宗郷	綱吉	(一) 宝永二・二・二五 宝永・一〇・一五(本丸) (二) 宝永三・一〇・一五 正徳一・九・五(西丸)	留守居	辞	御側衆、西丸御側衆	⑥
五九	土屋薩摩守利意	綱吉	宝永三・一〇・一五 宝永六・二・二一	廊下番頭	寄合	御側衆保田内膳正跡	⑥
六〇	松平大蔵少輔勝以	綱吉	宝永四・一二・一五 正徳三・八・三(西丸)	家千代様御守	大坂定番	西丸御側衆	⑥
六一	森川出羽守重興	綱吉	宝永六・四・六 宝永七・九・二一	大番頭	奏者番兼寺社奉行	御側衆	⑥
六二	北条対馬守氏澄	家宣	宝永七・九・二一 享保四・一・一二	大番頭	菊之間縁類詰	御側衆	⑥
六三	米津周防守田賢	家宣	正徳一・九・五 享保一・五・一六	留守居	菊之間縁類詰	御側	⑥
六四	大久保山城守常春	家宣	正徳一・九・五 正徳三・八・三	詰衆並	若年寄	御側	⑥
六五	三枝撰津守盛相	家宣	正徳三・八・三 享保一・五・一六	留守居	菊之間縁類詰	御側衆	⑥
六六	久貝因幡守正方	家宣	正徳三・八・三 享保一・五・一六	御側並	菊之間縁類詰	御側衆	⑥
六七	阿部志摩守正明	家継	正徳五・三・二一 享保四・九・二六	大番頭	卒	御側衆	⑥

①『柳宮補任』、②『古事類苑』、③『江戸時代制度の研究』に収録される側衆就任者のうち「江戸幕府日記」に就任記事の存在する人物を抽出した。「江戸幕府日記」の出典は以下の通りである。

- ①藤井讓治監修『江戸幕府日記―姫路酒井家本』第一巻、ゆまに書房、二〇〇三年。五四〇―五四一頁。
 ②藤井讓治監修『江戸幕府日記―姫路酒井家本』第九巻、ゆまに書房、二〇〇三年。四五二頁。

- ③ 藤井讓治監修『江戸幕府日記―姫路酒井家本―』第二六卷、ゆまに書房、二〇〇四年。四五頁。
- ④ 藤井讓治監修『江戸幕府日記―姫路酒井家本―』第二六卷、ゆまに書房、二〇〇四年。一八六頁。
- ⑤ 国立公文書館所蔵「江戸幕府日記」慶安元年六月一八日条。
- ⑥ 東京国立博物館所蔵「御日記」。